

優秀賞

柳澤 茉里 (二上小5年)
下田 愛華 (白鳥小6年)

佳作

吉野 帆夏 (道上小5年)
関 知佳 (金町小5年)
依田 仁湖 (東四つ木小6年)

中学校の部

最優秀賞

星 里音 (桜道中3年)

優秀賞

寺田 優奈 (上平井中2年)
長崎 光華 (新小岩中2年)

片山 葵陽 (水元中3年)
渡邊 彩心 (新小岩中3年)

佳作

片山 朝陽 (水元中1年)
岡 珠希 (小松中1年)
御田 佳那 (常盤中1年)
徳永 留嘉奈 (高砂中1年)

田島 里桜 (新宿中2年)

東京都小学校読書感想文コンクールにおいて、上千葉小学校 須貝戸智さん、二上小学校 柳澤健吾さん、柳澤茉里さん、白鳥小学校 下田愛華さん、東四つ木小学校 依田仁湖さんが、特選を受賞し、道上小学校 太田慈雨さんが入選しました。

特選を受賞した5名の中から、須貝戸智さん、下田愛華さんは都代表として青少年読書感想文全国コンクールに選出されました。

また、東京都中学校読書感想文コンクールにおいて、桜道中学校 星里音さんが都優秀賞を受賞しました。



限りある今を

中学校の部 最優秀賞

書名 「その日の前に」
著者 「重松 清」

この本を読もうと思ったきっかけは祖父だ。

祖父は難病で、肺がもう動かず、酸素濃縮装置をつけて何とか生活している。お盆休みに会ったとき、元気だった頃の姿と酸素濃縮装置をつけた姿の違いに私は戸惑つてしまつた。気丈だった祖父が吐いた弱音に祖母は悲しそうな顔をしていた。祖父のいないところで祖母は涙を流していた。

私は祖父と祖母にどんな言葉をかけられ良いのかわからなかつた。自分の無力さを痛感した。自分にできることは何なのか、すつと思考を巡らせていた。そんな時にこの本と出会つたのだ。

この本は短編小説集で、七編の話が収められている。最後の三話は一つの家族の物語として繋がつてゐる。この物語は、がんで亡くなる妻とその夫・二人の息子を中心にしてそれぞれの人物視点で「死」や「別れ」に向き合う姿が描かれている。

しかし、全ての話に共通していふことは、「その日」大切な人の別れの日」が迫る中で、人はどのように生き、どのように「その日」に向き合つたか、ということだと思う。特に心に残つているのは、夫が妻の病を知り、余命宣告を受けた場面だ。突然の知らせに困惑しながらも、何とか明るくふるまおうとする夫。その姿からは、本当は辛いけれど辛さは決して見せないという愛が伝わってきてとても切なかつた。また、妻の、

「辛い」「悲しい」で済ませてしまつてはいけない。大切な人と今まで過ごした時間は自分にとってかけがえのない宝物になつてゐるはずである。そうであれば、その宝物に感謝し、その不安が少しでも楽になるように寄り添つてあげなければいけない。

大切な人の「その日」は前触れなく突然訪れることがある。その時、私はきっと激しい後悔を感じるのだろう。もっと優しく接すれば良かつた。一言でも感謝を伝えておけば良かった。その人の時間ももっと大切にすれば良かった。

しかし、全ての話に共通していふことは、「その日」大切な人の別れの日」が迫る中で、人はどのように生き、どのように「その日」に向き合つたか、ということだと思う。特に心に残つているのは、夫が妻の病を知り、余命宣告を受けた場面だ。突然の知らせに困惑しながらも、何とか明るくふるまおうとする夫。その姿からは、本当は辛いけれど辛さは決して見せないという愛が伝わってきてとても切なかつた。また、妻の、

「その日」は、誰の人生にも必ずやつてくる。でも、母と過ごす日々は限られたものなのかもしない。「その日」は突然訪れる。母と過ごしている何気ない毎日が実際にこの言葉に感銘を受けた。「日常と違い、この言葉に感銘を受けた。毎日の暮らしといつのは、悲しさや悔しさを通り越して、呆れてしまふほどのものなのだ。」この言葉は、夫が自分自身に語りかけている場面でのものだ。余命宣告を受けて改めて実感した「日常の強さ」や「当たり前のありがたさ」について考えさせると共に、「その前の日々を大事に生きる」と示唆していた。人はいつか必ず死を迎える。家族、友人、そして自分自身も死を避けることはできない。でも、「その日」が来るまでをどう過ごすかは自分次第で変えることができる。それが大事なのだと思う。

自分にとって大切な人が、だんだんと弱っていく姿と向き合つていくこと、それはとても辛く悲しい」とだ。ただ、そのことを「辛い」「悲しい」で済ませてしまつてはいけない。大切な人と今まで過ごした時間は自分にとってかけがえのない宝物になつてゐるはずである。そうであれば、その宝物に感謝し、その不安が少しでも楽になるように寄り添つてあげなければいけない。

この本は「死」を正面から問題にしている。「死」をただ悲しいものとするのではなく、「生」と向き合うものとして積極的に捉えているのではないかと感じた。なぜなら、この本には悲しみだけでなく、一つ一つの言葉の奥に「あなたを思つている」という一貫した優しさがあり、また、大切な人がいなくなつても、世界は美しく続いていくのだといつう希望に溢れていたからだ。読んだ後も、心が温かくなり、自分の大切な人達の顔を思い浮かべたくなる、そんな一冊だった。

「その日」は、誰の人生にも必ずやつてくる。けれど、私たちがそれを忘がちだ。でも、これから私はこの本で学んだ「その日より前を大切に生きる」という考え方、周りへの感謝を忘れずに、一瞬一瞬を大切に日々、生きていく。

(原文ママ)